

大塚・音羽界隈を歩く

東京メトロ丸ノ内線 新大塚駅 南改札前 集合・出発

東京メトロ有楽町線 江戸川橋駅で解散予定 約4.3km

1. 東京メトロ丸ノ内線 新大塚駅 1954（昭和29）池袋—御茶ノ水の完成時に開業。

丸ノ内線はその後徐々に延伸され、1959（昭和34）に全通。なお、新宿以西の荻窪線は1962（昭和37）に開通。

2. 春日通り（国道254号線） 国道の拡幅事業のため、沿道建物の建て替えに際しては、拡幅後の道路境界線まで壁面の後退が義務づけられている。この15年で沿道の木造家屋はほとんど無くなった。一部の建物が老朽化したまま残っているのは、同所での建て替えがほぼできない状態であるため。新築マンションの前面に2、3階建ての低層部が出っ張っている場合もあるが、この部分は将来、拡幅が行われる際に取り壊すことを前提として、鉄骨造でプレハブ的に造られている。また、坂下通りとの間には、新大塚駅前から入る道以外には自動車が通行できる道がない。

3. T字型路地の階段（文京区大塚6丁目と、豊島区東池袋5丁目の区境） 下の階段部分の崖が区界。路地形成の詳細は不明だが、高台側と低地側双方の敷地内に造られた路地を繋いだのかもしれない。

西側：7段 東側：19段（下から13・6段） 区界部：10段（下から3・7段）

4. 文京区と豊島区の区界を通り抜ける階段（文京区大塚6丁目と豊島区東池袋5丁目の境界）

28段（下から8・4・5・8・3段） 春日通りへ3段階で上る。細街路拡幅事業のため、途中に幅員の広い箇所がある。

5. 豊島区立 鈴木信太郎記念館 フランス文学者、鈴木信太郎の居宅が2010（平成22）に豊島区に寄贈されたことを機に整備され、2018（平成30）に開館。以下の建物が豊島区有形文化財。書斎棟（1928（昭和3）竣工）は、RC造であるため戦災でも蔵書が焼失しなかった。一方、住居部分は木造だったため戦災で焼失。茶の間・ホール棟は、1946（昭和21）竣工。また座敷棟は、明治20年代に信太郎の実家（現在の春日部市内）に建てられた母屋を、1948（昭和23）に移築したもの。

鈴木信太郎（1895—1970（明治28—昭和45）） 東京大学教授、同文学部長、中央大学文学部教授、東洋大学教授、日本フランス語フランス文学会会長などを歴任。長男の**鈴木成文**（しげぶみ、1927—2010（昭和2—平成22））は建築学者で、東京大学名誉教授、元神戸芸術工科大学長。戦後、公営住宅の標準型「51C」（ダイニングキッチン付公営住宅の原型）の設計に参加。亡くなるまでこの家に住んでいた。また、次男の**鈴木道彦**（1929—）もフランス文学者。

6. 豊島区東池袋5丁目、新大塚駅そばの階段 18段（下から10・8段） ビルと塀の間を通る。下部は急で狭い。

7. 開運坂 かつて坂上に講道館の道場があり、師範（嘉納治五郎）が開運坂と命名したという。

8. 極めて狭い階段 10段 音羽川・水窪川上流部の蛇行した暗渠上の道から上る。

9. 水窪川・音羽川（みずくぼがわ・おとわがわ） 雑司が谷霊園の北側付近を水源として、坂下通り付近を通り、音羽の谷の東側端を流れ、神田川に注いでいた。音羽の谷の両側の小川は江戸期～明治期には紙漉きで知られ、工場や問屋が多かったというが、都市化に伴い、大正初期にはなくなってしまったという。

10. 大塚5丁目・末広りの階段

12段、幅1.6～3.6m、高さ約4m、長さ約10m、蹴上16～18cm、踏み面不規則、傾斜6～18° 『東京の階段』 p.123

11. 大塚5丁目・クランクした道の階段 最下部は幅1.2mとかなり狭い。階段の途中から2階へ入る梯子段がある。階段下部の木は2010年頃に伐採された。『東京の階段』 p.122

40段（下から5・23・12段）、幅1.2～3.0m、高さ約8m、長さ約25m、蹴上20cm、踏み面30/36cm、傾斜29/34°

12. 文京区立 大塚公園 1928 (昭和3) 開園 ラジオ体操の発祥の地ともいわれる公園。江戸期には松平長門守の下屋敷だった場所で、1896 (明治29) に東京市立養育院がここに移転してきた。1923 (大正12) の関東大震災後、内務省の依頼により大塚簡易療養所として使用され、養育院は現在の板橋区栄町に移転。1926 (大正15) 市立病院 (現 都立大塚病院)、婦人授産場、隣保館、託児所、児童健康相談所が設置された。この際、崖地と窪地として建築用として使用しにくい部分に、東京市公園課長で欧米視察から帰国したばかりの井下清が着目し、欧米風の設計施工による公園を造った。園内には露壇、大噴水、広場、花壇などがある。1988~91 (昭和63~平成3) に大規模な改修が行われ、初期の公園設計のデザインのいくつかは失われたが、本郷の元町公園と共に震災復興公園の記憶を残す公園となっている。

13. T字型の階段 春日通りから下り、左右に分かれる。下部の路地の出口付近の階段は左右共に昔からあったもの。90年代までは別々の道として斜面の上下を繋いでいたが、春日通り沿いに大きなマンション (アールヴェール文京大塚公園) が建設された際に、北側の階段の上部が無くなり、南側の階段の途中に付け替えられ、上部の階段道が一つになった。

T字型階段の下方の階段 南側 直 9段 (下から5・1・3段) 北側 直 7段

T字型階段 下部南側 L字 18段 (下から1・1・16段) **下部北側** 直 14段 **上部** 直 42段 (下から5・20・17段)

14. 大塚5丁目・ジグザグな階段 2011年に下水道工事が行われたため、一部変化している。

49段 (下から11・14・14・8・2段) 幅2.2~3.7m 高さ約10m 長さ約55m 蹴上15~19cm 踏み面28~64cm
傾斜18~33° 『東京の階段』p.121

大塚の扇形アプローチ 同心円状にステップが広がっていく変則的な階段。階段下の手前を音羽川が横切っていたという。

13段 高さ約3m 蹴上16~22cm 踏み面不規則 傾斜約30° 『東京の階段』p.55

扇形アプローチ階段上部 直 8段 関係者のみが利用している階段。

15. 大塚坂下通り 巢鴨拘置所へ至る道として造られた谷道の通り。東側に音羽川が流れていたが現在は暗渠化されている。通り沿いには最近まで多くの看板建築 (木造建物の前面のみ洋風にした店舗など) が建ち並んでいたが、マンション等への建て替えが進んでいる。住居表示的には大塚5丁目だが、町会は旧町名の 大塚坂下町会、大塚坂上町会のままで、地形的な区分に基づく町会が存続している。

16. 大塚先儒墓所 (おおつかせんじゅぼしよ) 江戸時代の儒学者が儒教式で葬られている。もとは徳川秀忠と徳川頼房の儒師だった人見道生の邸宅だったという。1670 (寛文10) に道生が没した際、邸宅内に葬ったのが儒葬墓地の始まりとされる。家族ものも含め64基がある (室鳩巢、木下順庵、柴野栗山、古賀精里ら)。仏式よりもやや細長い柱状の墓石がある。

室 鳩巢 (むろ きゅうそう、1658~1734) : 江戸時代中期の儒学者。新井白石の推挙で幕府の儒学者となり、徳川家宣、家継、吉宗の三代に仕え、献策と書物の選進を行い、吉宗期には享保の改革を補佐した。また、湯島聖堂で朱子学の講義を行った。

17. 吹上稲荷神社 1622 (元和8)、2代将軍徳川秀忠が日光山から稲荷の神体を賜り、江戸城内吹上御殿内に「東稲荷宮」と称したのが始まり。5代綱吉のころ、江戸城内から一ツ橋に移され、その後、水戸徳川家の分家、松平大学頭が拝領し、邸内 (現在の教育の森公園) に移した。1751 (宝暦元) に大塚の鎮守として松平家から善仁寺 (小石川4丁目) に移され、現在の社名に改名。その後、護国寺、薬師寺等に移遷し、1912 (明治45) に現在地に移った。

18. 西信寺南側の階段 41段 (下から9・19・13段) 細街路拡幅事業のため上部は幅員が広い。2006~07に改修された。

19. 水窪川跡から上る極小階段 3段

20. 富士見坂 (大塚富士見坂) 坂上からよく富士山が見えたことから。昔は狭く急だったそうだが、1924 (大正13)、路面電車を旧大塚仲町 (現・大塚三丁目交差点) から護国寺前まで通す際に、道路整備がされ、坂は緩やかになり道幅も広げられた。富士山は坂上から見て道路正面ではなくやや左側に見えていたため、ビルが建ち並んだ2000年頃以降はほぼ見えなくなった。

不忍通り 道路の開設は1922 (大正11)。目白台2丁目から護国寺前、千駄木、根津を経て、上野公園前交差点付近まで。

21. 大塚三丁目交差点 富士山がわずかに見える場所

22. 豊島岡墓地（豊島ヶ岡御陵） 文京区大塚5丁目にある皇族専用の墓地。宮内庁が管理。警備上、墓参できるのは縁故者または許可を受けた関係者に限られ、皇族の葬儀や祭事に際して記帳を受け付ける場合などを除き、一般人が敷地内に立ち入って墓参をする事はできない。皇族専用の墓地であるため、ここに葬られるのは薨去の時点で皇族であった者に限られる。民間から皇室に嫁いだ女性は葬られるが、生まれは皇族でも生前に自ら皇籍を離脱した者は葬られない。ただし戦後、1947（昭和22）に皇籍離脱したいいわゆる「旧皇族」の一部は特例として同地に葬られている。

23. 護国寺 真言宗豊山派大本山 1681（天和元）創建 徳川綱吉の母、桂昌院の発願によって創建された将軍家の祈願寺。祈願寺だったため檀家が無く、維新後は経済的に苦境に陥った。1873（明治6）、明治天皇の皇子の死去を機に、境内地5万坪のうち、東側の2万5千坪には皇族墓地（豊島岡墓地、天皇・皇后を除く）が造られた。また、西側の5千坪は陸軍用墓地となり、境内は2万坪ほどに縮小した。

仁王門 切妻造りの八脚門。元禄期以降の江戸期らしいが、詳細な建設年は不明。正面両脇に金剛力士像、背面に二天像（右に増長天、左に広目天）を安置する。桁行11.5m、梁間6m、軒高5m、棟高5m。

音羽富士（富士塚） 台地端の傾斜を利用して築造された富士塚。寺院境内にある富士塚は、神仏分離がされた今日では珍しい存在。塚の向かって右側には石造の洞窟がある。もとの富士塚は、石碑や石造鳥居の銘から1818（文化14）の築造と考えられているが、江戸期には寺の西側にあったそうで、明治以降、現在地に移築されたいらしい。頂上まで約56段。

不老門 階段を上りながら通り抜けるやや珍しい門。形式としては鞍馬山の山門を模したという。1938（昭和13）建立。門に掲げられた「不老」の二字は徳川家達（とくがわいえさと・徳川宗家16代当主（1863-1940））の筆によるもの。石段は46段（門前まで36段、通り抜け部分10段）

本堂 1697（元禄10）建立。5代将軍綱吉の命により建てられた、間口・奥行き七間の大型の建物。（国重要文化財）本尊は如意輪観世音菩薩。本堂落成時に、桂昌院の念持仏である唐物天然琥珀の如意輪観世音菩薩が安置されたが、その後これは秘仏となり、現在は六臂如意輪観世音菩薩像が安置され、六本の手で、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六つの世界をそれぞれ救うとされている。

大師堂 1701（元禄14）に造られた旧薬師堂を、1926（大正15）の火災の後、修理・移築して大師堂としたものらしい。擬宝珠に1705（宝永2）、正面前方の石灯笼には1790（寛政2）の銘がある。寄棟造り、棧瓦葺で、装飾が少なく、素朴な特徴を残す。

多宝塔 1938（昭和13）建立。近江（滋賀）石山寺の多宝塔を模範にしたもの。初重は三間（5.4m）四方。

鐘樓 江戸時代中期の建立。天保期には既に存在していたという。梵鐘は1682（天和2）に寄進されたもの。

月光殿 もとは滋賀の園城寺（三井寺）の日光院客殿。桃山時代の建立で、織田信長のとき大修理が行われたという、桃山期の代表的書院風建築。明治～昭和初期の銀行家・実業家だった原六郎により、建物と内部の襖絵は品川御殿山の原邸に明治25年以降に移築された。更に、実業家・茶人の高橋箒庵により、1928（昭和3）に現在地に移築され、月光殿となった。重要文化財。床の間の壁画は狩野永徳の筆と伝えられ、他の襖絵（花鳥図）も狩野派の絵師によって画かれている。（原美術館所蔵）

薬師堂 1926（大正15）の火災で旧大師堂が焼け、旧薬師堂が大師堂とされたため、一切経蔵が移築され薬師堂とされた。1691（元禄4）の建造で、擬宝珠や石灯笼に「一切経蔵、元禄4年」の銘がある。宝形造り棧瓦葺屋根で青銅製の宝珠が載る。正面の開き戸の両脇と側面には花頭窓がある。3間四方の小規模な建物だが、元禄時代の典型的遺構という。

墓所 大隈重信、山縣有朋、三条実美、大倉喜八郎、團琢磨、團伊玖磨、ジョサイア・コンドル、大山倍達、野間清治など。

惣門 方丈への軸線上にあり、東側の音羽幼稚園などへ入る門。寺院の門であると共に住宅の門という性格も持つ。社寺系の形式ではなく、5万石以上の大名クラスの武家と同格の屋敷門。江戸時代中期の元禄時代に竣工。（区指定有形文化財）

大仏（毘盧遮那仏） 筑波山神社の別当、知足院中禅寺を起源とする護持院から移されたもの。知足院は徳川家康以来、将軍家と幕府の祈祷を行っており、湯島に江戸別院を置いていた。徳川綱吉が1688（元禄元）に神田橋外（現 神田錦町）に移し、護持院と改称。1717（享保2）に火災で焼失した後、徳川吉宗によって護国寺境内に移され、護持院住職が護国寺住職を兼任するようになったという。しかし護持院は維新後の廃仏毀釈で筑波山の護持院と共に廃寺となった。その際、筑波山の護持院から銅製宝塔、銅製金剛力士像、銅製地藏菩薩立像などが護国寺に運ばれた。大仏は霞ヶ浦に打ち捨てられていたものを移したという。

24. 東京メトロ有楽町線 護国寺駅 1974（昭和49） 池袋～銀座一丁目間の開業と同時に開設。

25. 音羽通り 護国寺参道として成立した谷道。通り沿いは町人地、台地上は武家地。江戸期には護国寺の東西の谷から流れ来る音羽川と弦巻川が道の両側に流れていた。

26. 弦巻川 (つるまきがわ) 西池袋1丁目の元池袋公園付近の湧水を水源として南東に流れ、山手線を越え鬼子母神の北側を流れる。雑司が谷1丁目を経て護国寺前で南に流れを変え、音羽通りの西側に沿って流れ、江戸川橋で神田川に注いでいた。池袋の地名はこの川の水源近くに多くの池があることに由来するとも言われる。1932 (昭和7) に暗渠化された。

首都高速5号池袋線 竹橋JCTから池袋を通り、埼玉県戸田市の美女木JCTに至る。全線開通は1993 (平成5)。
護国寺出入口周辺の西神田出入口～北池袋出入口は1969 (昭和44) に開通。

27. 講談社

1909 (明治42) 大日本雄弁会設立 1934 (昭和9) 講談社本社社屋完成 2000 (平成12) 新社屋完成 (設計: 菊竹清訓)

28. 附属横坂・附属校坂 筑波大附属中・高校前を上る坂。Google Mapでは「附属校坂」と記されている。

29. 静岡県学生会館そばの階段 39段 (下から20・19段) 建物の間の狭く急な階段。中程に平場があるが手摺はない。

30. スカイハウス (菊竹清訓自邸) 1958 (昭和33) 竣工 (日本におけるDOCOMOMO 100選)

4枚の壁がスラブ床を空中に支える。家族の変化に対応して柔軟に増減し新陳代謝する家屋。

スカイハウスわきの階段

34段 (下から1・15・19段)、幅1.7m、高さ約7m、長さ11.5m、蹴上21cm、踏み面30cm、傾斜35°

菊竹清訓建築設計事務所 1997 (平成9) 竣工

菊竹清訓 (きくたけきよのり、1928～2011) 早稲田大学理工学部建築学科卒。

建築と都市の新陳代謝を図ろうとするメタボリズムを提唱。愛知万博 (2005) 総合プロデューサー。

作品: 都城市民会館 (1966～2019?)、エキスポタワー (大阪万博・1970)、アクアポリス (沖縄海洋博・1975)、江戸東京博物館 (1993)、ホテルソフィテル東京 (1994～2007)、昭和館 (1999)、九州国立博物館 (2005) など。

31. 鳩山会館 (旧鳩山一郎邸) 1924 (大正13) 竣工。RC・2F 設計: 岡田信一郎

音羽御殿の通称で知られる。長男、鳩山威一郎が亡くなった後、夫人の安子が住んでいたが、1995 (平成7) に修復工事を行い、増築部を撤去するなどして復元し、鳩山会館として公開された。ハトやミミズクなど鳥をモチーフにした装飾が特色。階段踊り場部分のステンドグラス (小川三知作) も見どころ。家紋は鳩ではなく、尻合わせ三つ雁金。資産価値50億円ともいわれる邸宅は、元々は鳩山一郎の名義で、一郎の死後、威一郎名義になり、その後は節税対策もあり団体名義 (政治団体を相続すると相続税は非課税) となった。安子の長男、由紀夫 (1947～) が居住する田園調布、次男、邦夫 (1948～2016) が居住した本駒込の邸宅は、安子が自らの六本木の土地を売却し、その資金によって買い与えたものという。

鳩山一郎 (1883～1959 (明治16～昭和34)) 第52・53・54代内閣総理大臣

鳩山威一郎 (1918～93 (大正7～平成5)) 大蔵事務次官、外務大臣

石橋安子 (1922～2013 (大正11～平成25)) ブリヂストン創業者・石橋正二郎の長女

岡田信一郎 (1883～1932 (明治16～昭和7)) 大阪市中央公会堂 (1917)、歌舞伎座 (1924)、黒田記念館 (1928)、明治生命館 (1934) などの設計で知られる大正・昭和初期の建築家。

小川三知 (おがわさんち 1867～1928 (慶応3～昭和3)) 慶應義塾大学旧図書館 (1911)、安藤記念教会 (港区、1917)、日本工業倶楽部会館 (1920)、小笠原伯爵邸 (新宿区、1927)、国立科学博物館 (1931) などにステンドグラスが残る。

32. 鼠坂 (ねずみざか) 小さな穴を鼠穴などという地名で呼ばれるのと同様、細い坂だから鼠坂と呼ばれたとか、鼠でなければ上り下りできないくらいだったからと言われる。また、音羽谷を流れる音羽川や弦巻川の水の流れが眺められたことから水見坂とも呼ばれたという話もあり、水見が転じて鼠になったという説もある。

84段 (下から29・2・36・17段) 幅3.2～4.0m 高さ約16m 長さ約75m 蹴上4/16cm 踏み面60～104cm、傾斜約9° 『東京の階段』p.138 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』p.090

鼠坂から分岐する道 52段 (28/24段) 幅3.0/2.3m 高さ8.0 (4.5/3.4) m 長さ18 (10/8) m 蹴上16/14cm 踏み面35/33cm 傾斜25/23° (各項の表記は下/上) 『東京の階段』p.138

33. 小日向2丁目 御賄方大縄地（おまかないかたおおなわち）だった場所。賄方は江戸幕府の職名で、江戸城内の食料品の供給に当たる役。大縄地は下級武士の宅地。職務上、同じ組に属する者がまとまって屋敷地を与えられたため大縄地・大縄屋敷といわれた。

34. 八幡坂（はちまんざか） 明治時代のはじめまで、現在の今宮神社の地に田中八幡宮があったため。

85段（下から25・29・31段） 幅3.1～3.6m 高さ約13m 長さ約80m 蹴上12～20cm 踏み面60～120cm 傾斜9～14°

『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』p.091

今宮神社

1697（元禄10） 護国寺建立時に境内に京都柴野今宮神社の分霊を迎え鎮座したことはじまる。

1873（明治6） 神仏分離により現在地に遷座。音羽・桜木・青柳の町内鎮守となる。

1945（昭和20） 戦災で手水舎以外が全焼。

1950（昭和25） 現社殿を新築。

35. 鷺坂（さぎざか） 坂上の高台は、徳川幕府の老中職をつとめた久世大和守（旧関宿藩（千葉県野田市関宿（せきやど））藩主）の下屋敷だった場所で、久世山（くぜやま）と呼ばれている。大正以降は住宅地になり、堀口大学（詩人・仏文学者1892～1981）も居住した。この堀口大学や近くに住んでいた詩人の三好達治、佐藤春夫らが、山城国（京都府城陽市）の久世に鷺坂という坂があることから、鷺坂の名を付けたことによる。「山城の久世の鷺坂神代より春ハ張りつゝ秋は散りけり」

『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』p.092

スズキ BALENOのCM（2016.11～）では、文京区小日向の鷺坂を車が上る様子が放映されている。

36. 神田川 井の頭恩賜公園内の井の頭池に源を発し、両国橋脇で隅田川に合流する、延長24.6kmの中小河川。かつては目白通り周辺は低湿地で氾濫原で川筋も蛇行していたが、護岸を造り河床を掘り下げるなどして、周辺を道路や宅地とした。

37. 神田上水 1590（天正18）に徳川家康の命を受けた大久保藤五郎（？～1617）によって開かれた上水道で、日本初の都市水道。江戸の六上水（神田上水、玉川上水、本所上水（亀有上水）、青山上水、三田上水（三田用水）、千川上水）のひとつで、古くは玉川上水とともに、二大上水といわれた。

関口大洗堰から巻石通りを経て、水戸屋敷に入った水は、邸内の飲料水や生活用水及び庭園の池水に使われ屋敷を出る。その後、御茶ノ水の懸樋（水道橋の由来）で神田川を横切り、まず神田の武家地に給水した。そこから三手に分岐し、一つは神田橋を経て、道三堀北側の大名屋敷に、もう一つは神田川北岸の武家地に、最後の一つは神田川南岸の武家地及び町人地に給水した。町人地に向かう水は更に二手に分かれ、一方は日本橋北側・内神田、もう一方は日本橋南側に給水していた。給水順序は武家地が優先で、残りの水を町人地へ給水していた。

神田上水は明治維新後も利用されていたが、江戸の上水道は浄水を行っていなかったため、1886（明治19）のコレラの大流行を抑えられなかった。これを契機として、1892（明治25）に改良水道の工事が開始され、1898（明治31）には大部分が完成し、淀橋浄水場が通水した。飲料水としての神田上水の使用は1901（明治34）までで、以後は水戸屋敷跡他に設けられた兵器工場（陸軍砲兵工廠）の工業用水として利用された。

巻石通り 関口大洗堰で分水された神田上水の水が、通りの北側に沿って流れていた。江戸期は開渠だったが、明治11年頃に、水質を保つため「巻石蓋」と呼ばれる石蓋をかけたため、巻石通りとも呼ばれている。

38. 江戸川橋 神田川から日本橋川への川筋はかつて「平川」と呼ばれていたが、二代秀忠の時代に御茶ノ水付近が開削されて川筋が付け替えられ、関口から飯田橋までは江戸川、飯田橋から浅草橋までは神田川となった。橋名はこの川名に因るもの。1965（昭和40）の河川法改正で江戸川の名が廃止され、神田川に統一された。

39. 東京メトロ有楽町線 江戸川橋駅 1974（昭和49）開業。駅名は神田川（昔は江戸川）に架かる同名の橋から。

【周辺の町名】

音羽 1697（元禄10）に護国寺領となり門前町屋が設置されたが人が入らず、桂昌院の信任が厚かった奥女中の音羽という人物にこの門前町が与えられたため、後に「音羽町」と名付けられた。

小日向（こひなた） 鶴高日向という人の所領で、家が絶えたあと、「古日向」といっていたのが転じたとされる。地元では「こびなた」と濁って発音されることが多い。1965年前後の住居表示に伴う調査の際、「こひなた」とされたが、学校名や町会名などは、「こびなた」と呼ばれ、書かれ続けている。

大塚（文京区） 文京区大塚1-2の貞静学園の場所に、昭和初期まで高さ5尺ほどの塚があり、古墳だったとか中世の塚や物見櫓の跡だったともいわれてきた。江戸期の資料にはこの塚が大塚の由来だと記されていたという。小日向台北部の広い範囲の地域名となり、現在は文京区に大塚が、北側の豊島区には南大塚と北大塚がある。

北大塚・南大塚（豊島区） 豊島区内に大塚駅ができてしまい、その周辺も大塚と呼ばれるようになったことから、1969（昭和47）の住居表示実施の際、実態に合わせて駅の北側が北大塚、南側が南大塚とされた。

参考文献・参考サイト

- 『江戸東京坂道事典』石川悌二、新人物往来社、1998 『今昔東京の坂』岡崎清記、日本交通社出版事業局、1981
 『東京の階段』松本泰生、日本文芸社、2007 『川の地図辞典—江戸・東京23区編』菅原健二、之潮、2007
 『江戸・東京地形学散歩』松田磐余、之潮、2008 『川跡からたどる江戸・東京案内』菅原健二、洋泉社、2011
 『東京古道散歩』荻窪 圭、中経文庫、2010 『凹凸を楽しむ 東京「スリバチ」地形散歩』皆川典久、洋泉社、2012
 『甦った東京 戦災復興区画整理事業誌』東京都 『凹凸を楽しむ 東京坂道図鑑』松本泰生、洋泉社、2017
 東京23区の坂道 <http://www.tokyosaka.sakura.ne.jp/index.htm> 坂学会 <http://www.sakagakkai.org/>
 猫の足あと—東京都・首都圏の寺社情報サイト <http://www.tesshow.jp/index.html> 他、Wikiped
 東京の斜面地空間 東京の階段 <http://tokyostair.web.fc2.com/topo/index.html>
 東京の階段 DB <http://blog.goo.ne.jp/tokyostair/> 都市徘徊Blog <http://blog.goo.ne.jp/asabata/dia>